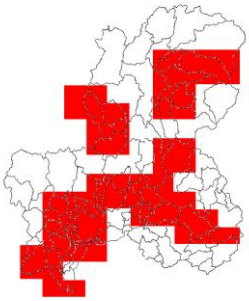
クヌギ	*Quercus acutissima* Carruth.	情報不足
	クヌギ科	

選定理由	県内では産地がある程度限られる植物で、一箇所の生育地での消滅が県内個体の絶滅にすぐ直結することはないが、生育地の消滅が継続的に起これば、県内個体の絶滅につながるため。県内の個体は全てまたは大半が植栽または逸出起源と推定され、自生個体は少ない可能性があるが、詳細な分布は不明。	写真（岐阜県博物館） 標本
形態の特徴	落葉高木。樹皮は不規則に割れ、灰褐色。成葉の上面は無毛で光沢ある緑色、下面は無毛で淡緑色、洋紙質、葉柄はやや長い。葉身はアベマキとクリに似て長卵形-長楕円状被針形、鋭尖頭-鋭頭、基部は円形、芒状鋸歯縁、葉脈は約15。花は4-5月。堅果は翌年秋に暗茶褐色に熟し球形、殻斗は半球状、総苞片は広線形でねじれて開出。	
生態的特徴	丘陵地や山地の二次林や落葉広葉樹植林に生育する。集落付近にも見られる。	
分布状況	本州、四国、九州。朝鮮（済州島を含む）、中国東部・中部・南西部、台湾。県内ではあちこちに点在する。時にまとまった個体数で生育する。山林中に生えるものはほとんどない。	
減少要因	丘陵地などの集落近辺の樹林地の開発による生育地の消滅。	
保全対策	丘陵地などの集落近辺の開発の抑制。	
特記事項	国内でシイタケのホダ木用によく植栽される種で、県内の個体は植栽か逸出起源が多いと推定される。もともとの自生個体が存在するのかどうかも含め、自然分布の状況が不明。	
参考文献	Flora of Japan. Volume Ⅱa. Angiospermae Dicotyledoneae Archichlamydeae(b). 2001. KODANSHA. Edited by Kunio Iwatsuki David E. Buufford and Hideaki Ohba. Fagaceae H. Ohba	

文責：高野裕行